

現職教員の教育相談に対する認識を深める研修の試み

笠井 孝久

千葉大学・教育学部

Practice of the Seminar to Improve Teacher's Understanding about Educational Counseling

KASAI Takahisa

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、現職教員の教育相談に対する認識を向上させる研修を実施し、その効果を検討した。はじめに、研修でのワークを通して、現職教員の教育相談についての認識のデータを収集し、そこから自らの教育相談の力を判断する視点や基準を持っていない教員が多く存在することが明らかになった。また、教育相談という活動の明確なイメージを持っていない教員が少なからずいること、ある程度のイメージは持っていますが、その内容は教員によってかなりの違いがあることが推察された。

このような現状には、教育現場において、教育相談の概観が明示されていないことやそれを意識する機会が少ないことが影響しているのではないかと考え、教育相談の概観を提示し、自分の教育相談に対する認識を確認、整理するような研修を計画し、その効果を検討することとした。

研修は、自らの教育相談に対する認識を確認した後、他の受講者とのシェアリング、教育相談の概観を示す資料を用いた講義という流れで実施し、研修終了後に記載してもらった感想では、「教育相談に関する認識が整理された」、「新しい理解を得た」といった内容が数多く記載されていた。

この経過から、教育相談の概観を明示し、それを検討する作業は、教育相談に対する教師の認識を整理したり、自らの教育相談活動を意味づけたりする機会になることが示唆された。

キーワード：現職教員 (teacher)、教育相談についての理解 (understanding about educational counseling)、
教員研修 (seminar for teacher)

現職教員を対象とした教育相談の研修や事例研究を行うと、教員によって教育相談に対する理解やとらえ方が大きく異なることに気づく。筆者は以前に行なった、現職教員の感じる教育相談の難しさ(教員はどのようなところで教育相談の難しさを感じているか)についての調査の際にも、「教育相談とは、教育相談週間に児童と面接をすること」というように、教育相談活動の一部だけを教育相談としてとらえていたり、生徒指導や学級経営に関する課題を教育相談の一部と認識している教員も少なからずおり、教育相談についての理解には教員間で、かなりの温度差があることが示唆されている(笠井, 2015)。

子どもたちの抱える困難が、多様化、複雑化する現代の社会状況では、チームとしての対応が求められるところであるが、教育相談についての理解が不十分なために、教員自身が自らの活動に自信を持てなかったり、教員集団において、また他機関との連携において、教育相談の内容や方法に対する意識や理解が異なることは、児童生徒を支援する活動に対してマイナスの影響を及ぼす可能性がある。また、このような理解の不十分さや認識の温度差は、教育相談的な考え方や方法が学校現場にしっかりと根付きにくい状況を作っているのではないかと推察

される。

このような意識や理解の違いが生じる要因として、いくつかのことが考えられる。例えば、教育相談という営み自体が、その全体像がつかみにくいものであること、教員の教育相談に対する意識、研修・学習機会の少なさなどである。教育相談という営みは、具体的に「こういうことをすれば」、「これができれば」、また「こういう結果が得られれば」それが教育相談である」と言うことが難しい。なぜなら、教育相談が対応する1つ1つの出来事の性質に応じて、関わり方や目標、結果がそれぞれ異なるからである。そのため、具体的な目標や関わり方をその都度判断し、選択していかなければならない。また、いったんは目標や方法を決定しても、それがうまくいくか、試行錯誤が必要である。効果が出るまで時間がかかる場合もある。このような性質が、教育相談を理解しにくくしている一つの要因であろう。

また、研修機会の少なさも教員の教育相談の認識に影響を及ぼしていると考えられる。校内研修で定期的に教育相談に関する内容を実施している学校は稀である。教育委員会等が実施している研修は多くあるが、本人がその気になってそれらの研修に参加しなければ、何年もの間、教育相談に関する研修を受けないという事態も生じる。実際、そのような教員のほうが多いと推察される。そのような状況でも児童生徒への支援は行われており、

それらは自らの実践を理論的に構築したり、意味づけたりすることなく、経験と勘に頼ったものにならざるを得ない。

このような教育相談に対する認識の曖昧さや偏りに対して、まずはその概観を示すことが重要だと考えた。学校現場では、目の前の問題への対応が求められることが多く、教育相談の理念に則った関わりよりも問題の解消が優先されてしまうこともある。また、全体像が示されていないために、「教育相談週間での面談が、教育相談」という偏った理解に繋がることもある。“教育相談とは、どのようなものか”という概観を示すことが、現職教員に教育相談の活動をより具体的にイメージさせ、適切な実践につなげたり、他の教員や関係者との連携においてスムーズな情報共有、協働が行えるようになることが期待できる。

そこで本研究では、教員の教育相談に対する認識を向上させるための研修を実施し、その効果を検討する。具体的には次の2点を目的として、調査、実践を行う。

- ① 現職教員の教育相談に対する認識の実態を明らかにする。
- ② 現職教員が教育相談を理解する枠組みを提示し、それを活用した研修を実施することで、教育相談に関する認識にどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

1 現職教員の教育相談に対する認識

現職教員が教育相談をどのように認識、理解しているかを確認するため、教員研修において教育相談についてのワークを実施し、そこから収集したデータの分析を行った。

【調査方法】

- (1) 対象：教育相談に関する研修に参加した現職教員62名。
- (2) 方法：研修の一環として、受講者自身の教育相談に対する認識を確認するワークを行った。ワーク終了後、データ使用の目的、個人情報保護等を説明し、ワークシートに記載された内容を利用させてもらった。

(3) ワークシートの内容

ワークシートの内容は、以下の4つである。

① 自分自身の教育相談の力量について

現職教員が自分自身の教育相談に対する力量をどのように判断しているかを、「かなり身につけている」、「まあまあ身につけている」、「あまり身につけていない」、「身につけていない」、「よくわからない」の5つの選択肢の中から1つを選択してもらい、さらにそのように判断した理由を自由に記述してもらった。記載された理由を分析することで、教員がどのような観点(指標)を用いて、教育相談の力量(教育相談ができ

ているか)を判断しているかを知ることができる。

② 所属校の教育相談体制について

自らの所属校の教育相談体制をどのように判断しているかを、「よく機能している」、「まあまあ機能している」、「あまり機能していない」、「機能していない」、「機能しているのか、よくわからない」の5つの選択肢の中から1つを選択してもらい、さらにそのように判断した理由を自由に記述してもらった。記載された理由を分析することで、教員たちがどのような視点(指標)から自校の教育相談体制が機能していると考えているのかを知ることができる。

③ 教師にとって必要な教育相談の考え方や技術

教育相談を進めるにあたり、教師にとって必要な考え方や技術はどのようなものかと思うかを自由に記述してもらった。

④ 教育相談を進める上で、大切にしていること

教育相談を進めていく上で、自分自身が大切にしていることを自由に記述してもらった。

本報告では、①、②のデータを用いて教員の教育相談に関する認識をとらえることとする。

(4) データ収集の時期：令和3年8月

【結果】

(1) 自己の教育相談の力量の判断とその理由

自己の教育相談の力量を5つの選択肢から選んでもらった結果を表1に示す。回答の分布を見ると、「まあまあ身につけている」と回答した者がおよそ24%、それ以外の75%は「十分にはできていない」、「できているのかいないのか、わからない」と選択している。子どもへの支援は行っているが、それが教育相談と言えるのか、あるいは自分の関わりが適切なかわからない、といった疑問や不安を持っている教員が多いことがわかる。

表1 自己の教育相談に関する力量の評価

選択項目	選択数 (%)
かなり身につけている	0 (0.0)
まあまあ身につけている	15 (24.2)
あまり身につけていない	26 (41.9)
身につけていない	2 (3.2)
よくわからない	19 (30.6)

それぞれの選択の理由を抜粋してまとめたものが表2である。これらの結果を見ると、判断の理由は人それぞれ多岐にわたっていることがわかる。

表2 自己の力量の判断理由

○「まあまあ身につけている」を選択した理由

- ・子どもとよく話すように心がけている。小さなことでも子どもが相談してきているから。(小学校)
- ・子どもとたくさん関わり、学校生活内外のことについても子どもと話をしたり、子どもからも気軽に話しかけられたりしている。(小学校)
- ・それぞれの学部で担任として生徒指導や教育相談を行ってきた。(特別支援)
- ・それなりに対応できて、大きなトラブルになっていないから。(小学校)

- ・学校の中で相談を担当し、保護者、教員、子供から相談される役割なので。件数もこなしている。(小学校)
- ・職務上、子どもの困り感を共有しているから。(小学校)
- ・研修を多くしてきた。それを生かして対応している。(小学校)
- ・生徒指導主任をしていた時、研修に参加したり、文献などで学んでいるため。(小学校)
- ・学生時代から興味を持って研修を受けてきた。そのことを生かしてクラス児童の様々な問題に向き合ってきた。(小学校)
- ・カウンセリング (小学校)
- ・養護教諭として、子どもの内面に目を向けて接するよう心がけている。(中学校)
- ・他と比べたことがない。基準がわからない。(小学校)
- 「あまり身につけていない」を選択した理由
 - ・専門的に学んだことがないため、子どもたちが困っていることに対して相談にのることはできるが、正しく解決に導けるか自信がない。(特別支援)
 - ・教育相談がわかっていない。個に応じた支援はしているが、どうしたら正解なのか不安。(特別支援)
 - ・自分なりにはこれまでの経験をもとに支援の必要な子どもの対応をしているつもりではあるが、それが正しいか自信があるとは言えない。(小学校)
 - ・子ども一人一人に合わせた適切な教育相談ができていないのか不安な部分がある。(小学校)
 - ・考え方の軸になる部分が自分の中で明確でない。これでいいのか?と思いつつ対応している。(中学校)
 - ・教育相談とは何か、を理解してない。個に応じた支援をしているが、どうしたら正解なのか不安。(特別支援)
 - ・研修などで教育相談について学んだりしているが、教育相談とは何か、よく理解できていない。(小学校)
 - ・教育相談に関する知識がない。(小学校)
 - ・基礎的スキルがない。自己流で、学んでないまま行っている。(特別支援)
 - ・子どもや保護者に寄り添い、共感するために、具体的にどうすべきか、何を伝えるべきか難しいと感じる。(小学校)
 - ・発達検査などの研修、活用できる関係機関などに関する情報不足を感じている。(特別支援)
 - ・子どもの本音をうまく聞き出すことができていない。(小学校)
 - ・面談は行って、子供の様子を把握しているが、日常生活でいかしていないと感じるから。(小学校)
 - ・担任している児童の理解が十分でないと感じる。児童とじっくり話す時間が取れない。(小学校)
 - ・児童生徒の困り感を把握し、それに対してどのような手立てを講じるか、まだまだ力不足である。(特別支援)
 - ・子どもから気持ちや考えをうまく引き出せず、つい自分がしゃべりすぎてしまう。どういう声かけをすると、子どもの気持ちを引き出せるのかがよくわからない。(小学校)
 - ・日々、教育相談は行っているし、教育相談は必要不可欠なものだと思うが、その力を誰かに評価してもらったことがないので、どう判断してよいか難しい。(特別支援)
 - ・身につけているのか、自分で判断できない。自己流で進めることも多く、正解がわからない。(小学校)
 - ・経験年数が浅いこともあり、自分自身教育相談としてとらえた指導をしていない。(特別支援)
 - ・これが教育相談だと意識して行っていないから。(小学校)
- 「身につけていない」を選択した理由
 - ・まだ経験が浅い。(特別支援)
- 「よくわからない」を選択した理由
 - ・「教育相談とはどのようなものか?」と問われ、どんなものなのか具体的に説明できないと思った。(特別支援)
 - ・教育相談とは何かを考えたが、答えられない。(小学校)
 - ・教育相談についてよくわかっていない。(小学校)
 - ・教育相談を勉強していないので、何が教育相談なのかわかっていなかった。(小学校)
 - ・範囲(教育相談)がよくわからない。(中学校)
 - ・対生徒については、障害の重い生徒の担任をしていることもあり、言葉でやりとりする教育相談を行う場面がないため分からない。対保護者では、ある程度丁寧なやりとりができていく。(特別支援)
 - ・子どもの困り感を確認し、学校と家庭をつなぐ役割を果たしていると思っているが、身につけていると自信を持って言えない。(特別支援)
 - ・市や教育センターの研修、大学の講座などで勉強したが、やればやる程難しく、スキルとしてこれができるれば絶対というものがない。(小学校)
 - ・相談した児童が、自分の力で良い方向にいったのか、環境の変化でよくなったのか、いまいまいちわからない。(小学校)
 - ・教育相談に力量があると考えたことがなかった。(小学校)
 - ・日々の生活の中でのチャンス相談を大切にしている。休み時間もなるべく児童の近くにおいて、身近な存在と感じてもらおう努力をしているが、それでも問題が発生する。(小学校)
 - ・様々な相談の中で、自分の苦手なものがある。(小学校)
 - ・生徒指導にかたむきがちで、何か答えを教師が出さないといけないような気がしてしまう。(小学校)

「まあまあ身につけている」と選択した理由としては、
児童生徒とのよい関係(話しやすい、相談できる等)

が構築できていること、これまで大きな問題なく、教育活動を続けてきたことなどが理由としてあげられて

いる。また、教育相談担当等の役割を果たしていることや研修経験なども「身につけている」と選択する理由となっている。「基準がわからない」としながら、「まあまあ身につけている」と選択したケースもあった。

「あまり身につけていない」と選択した理由では、教育相談をよく理解していない、学んでいないで、毎日の対応はしているが、それでよかったのかわからない、自信がないといった意見が多くみられた。具体的な知識やスキルの不足も選択の理由として多くあげられている。

「よくわからない」を選択した理由では、「教育相談がよくわかっていない」という内容が多くあげられていた。また比較的経験年数の多い教員が、経験を積んだり、学習すればするほど、教育相談の難しさがわかり、教育相談の力が自分についているのかわからなくなる、といった内容を理由としてあげていた。

(2) 所属校の教育相談体制に対する評価

所属校の教育相談体制が機能しているかを5つの選択肢から選んでもらった結果を表3に示す。学校の教育相談体制については、「よく機能している」、「まあまあ機能している」と選択した者が70%を越えている。

表3 所属校の教育相談体制に対する評価

選択項目	選択数 (%)
よく機能している	5 (8.1)
まあまあ機能している	40 (64.5)
あまり機能していない	10 (16.1)
機能していない	0 (0.0)
よくわからない	7 (11.3)

所属校の教育相談体制について選択した理由をまとめたもの(抜粋)を表4に示す。

表4 学校体制についての判断の理由

- 「よく機能している」を選択した理由
 - ・月に1回、その月の児童の様子と共に、生徒指導、教育相談について教員間で共通理解が必要な事について話し合いをしている。(小学校)
 - ・学級担任、養護、学年主任、教務、教頭、校長が連携して児童、保護者の対応をしている。又、スクール・カウンセラーによる相談体制が整っている。(小学校)
 - ・ベテランの担当が数名おり、担当が迷い、わからない時は相談にのってくれる。(特別支援)
 - ・年間行事で相談日が周知されている。日報等に記載されるので、全職員の意識に入っている。相談には特別支援コーディネーターや学年主任が同席する場合もある。(小学校)
 - ・コーディネーターの先生が関係機関と連絡をとっている。(特別支援)
- 「まあまあ機能している」を選択した理由
 - ・困ったことがあったら、担任一人で悩まず、複数の先生、コーディネーター、必要に応じて、その他の機関につながるよう体制がとられている。(特別支援)
 - ・個々のケースについて、学年や近隣学年、担当と話をする時間はあるが、定期的に部会を開いて話し合うことはできていない。(小学校)
 - ・定期的に教育相談会が実施されている。特に高等部への入学を考えているご家庭は教育相談を受けるようになってきている。(特別支援)
 - ・子どもたちの情報を校内で共有し、学年全体で見ているという体制はあると思う。具体的にどのような手立てを取るかという話まではできていない。(小学校)
 - ・教育相談の期間が設けられている。先生方との情報交換、共有がしやすい環境である。(小学校)
 - ・管理職にすぐ相談できる。(小学校)
 - ・問題があったとき、すぐに校長、教頭が話を聞き、対応について確認することができている。(小学校)
 - ・月1回、教育相談部会があり、校内での対応について組織として対応しようとしている。(小学校)
 - ・教育相談週間がある。問題は主任、管理職で共有し、職員会議で報告する。相談ボックスがある。(小学校)
 - ・特支コーディネーター、生徒指導、教育相談が連携して学級、児童、保護者と向き合っている。しかし異動があり、メンバーが変わると同じようにいかない部分がある。(小学校)
 - ・年3回、相談期間があり、子どもたちからのアンケートをもとに面談をしている。面談で気になる子に、それぞれ対応するという形ができていく。月1回、気になる子について話し合い、共有する機会がある。(小学校)
 - ・教育相談部会が開かれている。(特別支援)
 - ・コーディネーターが学校全体をよく見ていることと、管理職も子ども一人一人をよく見ている。(小学校)
 - ・講師を招いて研修をしている。学年や養護教諭、管理職との相談、報告体制ができていく。外部機関とのつながりは薄い。(小学校)
 - ・相談主任、心の相談員、SCとの情報交換。QUの実施。校内研修で事例検討を行なっている。(小学校)
 - ・ケース会議を多く行っている。SCと全校児童が面談している。(小学校)
 - ・アンケートをもとに教育相談をして、生徒指導委員会で共通理解をしているから。(小学校)
 - ・1人1人の話をゆっくりと聞く時間の確保が十分にできていない。(小学校)
 - ・相談週間があったり、報告体制がわかりやすかったりするので。(小学校)

- ・学校生活アンケートやQUテストの結果などをもとに、児童と個別の対話をする機会を設けている。(小学校)
- ・子どもたちとの対話の場を多く設定している。(小学校)
- ・教育相談週間は全職員で実施しているが、やりっぱなし(個々の教員任せ)のところがあり、全員で共有できていない。(小学校)
- ・校長が教育相談に理解が深く、子どもや親の問題をチームとして事にあたっている。(小学校)
- ・教育相談週間の実施。教育相談箱の設置。(小学校)
- ・規模が大きい学校なので、担任だけでなく、色々な教師が児童に関わることができる。教員間でも情報共有ができている。(小学校)
- ・年2回、教育相談週間の他に、月1回のミニアンケートを行い、困っていることや相談したいことがないか聞く機会を設定している。定期的にケース会議を開き、共通理解に努めている。(小学校)
- ・担任のみではなく、チームで支援している点。適宜ケース会議を持つなど、場を作っている。普段の会話の中でも児童の話をよくしている。(小規模だからできる)(小学校)
- ・教育相談期間を設けている。オープンに意見を聞ける雰囲気がある。(小学校)
- ・個々の学級では機能していると思うが、それが他の教職員に伝わっていないと感じることがある。もっと学校全体での共有、連携が取れるようになるとよいと感じる。(小学校)
- ・設定はされているが、それが十分なのかどうかは不明。(中学校)
- ・分掌がある。アンケートを実施している。(小学校)
- ・問題が生じた時の支援の流れができており、いつでも相談、対応ができる環境づくりをしている。職員全体で共通理解をする難しさはある。(特別支援)
- ・支援部があり、教育相談を主としている先生はいるが、校外での相談も多く、校内の問題や相談は、担任が中心になって行っている。定期的に教育相談週間やアンケートは行うが、答えることが難しい生徒も多く、形だけになってしまっている部分もある。(特別支援)
- 「あまり機能していない」と選択した理由
 - ・組織的ではない。継続的になっていない。(小学校)
 - ・気になる生徒の情報交換はするが、どうしていくかは担任任せな部分も多い。どうにもできなくなって困る先生が多い。特に原因不明の不登校。(中学校)
 - ・教育相談週間で各クラスの実態は管理職に報告されるが、それ以外はほとんど機能していない。(小学校)
 - ・学校全体としては、いじめアンケートと体罰アンケートだけで、何かの取り組みをしているわけではない。(小学校)
 - ・教育相談週間アンケートしか取り組んでいない。形式的なことだけでなく、もっと働きかけが必要。(小学校)
 - ・意識して取り組んでいる先生もいるが、指導に手一杯となり、そこまで児童の話聞いていない様子がある。(小学校)
 - ・生徒指導、教育相談に対する意識が高くない職員も見られる。(小学校)
 - ・SCがいるが、周知があまりされておらず、うまく活用されていない。(小学校)
 - ・SCが2週間に1日の勤務。その日は予約が一杯になり、いざ相談がしたい時にできないこともある。(小学校)
- 「機能していない」を選択した理由
 - ・選択なし
- 「よくわからない」を選択した理由
 - ・個々の教員は懸命に行っているかもしれないが、「体制」としてどうなっているかは見えづらい。(特別支援)
 - ・学年間で、日常的に生徒の情報は共有できていると感じているが、学校全体で考えた時、疑問が残る。(中学校)
 - ・「教育相談」について私のイメージが固まっていないため。学校ではそういう週間があり、一人一人と話をして解決に動き、報告はしている。
 - ・教育相談週間はあるものの、いじめアンケートの聞き取りや生徒指導の時間になってしまいがち。(小学校)
 - ・特別支援学校における教育相談というと、入学前(高等部では入試前)の相談があり、これは丁寧に行われている。校内では必要に応じてケース会議も行われるが、体制というよりは、問題や担任の意識によってやっぱりやらなかったりしている気がする。(特別支援)

「よく機能している」、「まあまあ機能している」を選択した理由では、管理職を含めて、教員間の情報共有ができていることや相談しやすい環境があること、複数の教員、コーディネーター、SCなども含めてチームとして対応ができていること、定期的な会議や必要に応じたケース会議などが開催されていること、問題が生じた時の流れができていて、素早い対応ができること、アンケートや教育相談週間を実施していることなどがあげられた。

「まあまあ」になってしまった要因として、教育相談

週間やアンケートが形だけになっていて、うまく活用できていないこと、教員間で温度差があり、学校全体としてまとまっていないこと、などがあげられている。

「あまり機能していない」を選択した理由としては、組織的、継続的でないこと、情報交換やアンケート、教育相談週間などは行われているが、そこから先の話し合いや対策などが行われていないこと、教員間に温度差があり、意識の高くない教員もいること、SCの活用の課題などがあげられていた。

「よくわからない」と選択した理由としては、個人

での取り組みや学年単位での情報共有は行っているが、学校全体としては活動が見えづらいこと、教育相談のイメージが明確でないため判断できないというもの、教育相談期間の課題などがあげられた。

【考察】

自らの教育相談に対する力量及び所属校の教育相談体制について、それらを評価するワークを通して、教員がどのようなことを“教育相談”としてとらえているかを明らかにすることを試みた。

自己の力量を判断した理由からは、「やっていることが正しいのか、よくわからない」、「ちゃんとできているか、自分では判断ができない」といった意味を含んだ回答が多く見られた。これは、多くの現職教員が自らの実践を判断する基準を持っていない、あるいは基準が曖昧な状況にあることを示すと考えられる。

学校の教育相談体制を「(まあまあ)機能している」と判断した理由では、アンケートや教育相談週間といった活動や教育相談部会、ケース会議、教員間の情報交換といった具対的な活動が実施されていることがあげられていた。具体的な活動が行われている分、自らの力量よりは判断しやすかったようだ。自己の力量の判断よりもポジティブな選択が多かったが、このような教員の認識(判断)と教育相談が実際にうまくいっているか、ということとは分けて考えておく必要がある。定期的に生徒指導部会や教育相談部会が行われていても、気になる児童生徒の報告で終わってしまい、学校としての方針や役割分担などはなされず、結局は学年任せ、担任任せになってしまっている場合もある。また、教育相談週間でも、「困っていることはない、という児童に対して、何を話してよいかわからない」、「教育相談週間の目的がわからない」といった話を聞いたこともある。

今回のデータからははっきりしたことは言えないが、教員の教育相談に対する理解や認識が、形式的な面での判断に止まらず、その内容や効果を踏まえて判断がなされているかに注意を払う必要がある。そのような判断ができる力も、教育相談の力量と言えらるだろう。

2 理解を深めるための枠組みを用いた研修の実践

先に述べたように、教育相談の概観を示すことが、現職教員が教育相談の活動をより具体的にイメージしたり、他の教員や関係者との連携に役立つのではないかという発想から、教育相談の概観を示す資料を用いた研修を実施し、その効果を検討した。

【研修の内容と流れ】

千葉県教育関係機関が実施した教育相談研修において、以下のような流れで研修を進めた。

- 1) 導入：本研修の狙い、進め方の説明 (およそ20分)
- 2) ワークシートの実施 (およそ30分)
- 3) ワークシートに記載された内容を小グループでシェアリング (およそ40分)
- 4) 筆者による教育相談に関する講義 (およそ60分)
- 5) まとめ (10分)

【講義の内容】

教育相談という営みの内容と範囲を具体的に明示し、教員に教育相談の概観を理解してもらうために、図1のような講義の内容を構成した。

先にも述べたように、曖昧な認識や偏った理解をしている状況があるので、教育相談という営みの全体が概観できるよう配慮して内容を選定した。また、説明に際しては、教育相談の位置づけ(生徒指導との違い等)や「問題行動の理解と支援」などの教育相談の中核にあたる部分とそれを支える部分の違いを意識できるように配慮した。教育相談を進める上で重要だと思うことを現職教員に尋ねると、「共感」や「傾聴」、「子どもからの信頼(悩みを相談しやすい関係)」や「教師間の情報共有」などがあげられる。もちろん、それらは重要なものだが、それだけでは問題が解決しなことも多い。「共感」や「信頼関係」は、問題を解決するための手段であり、目的は子どもの成長や問題の解消であることを意識してもらいたいとの思いから、中核になる部分とそれ支える部分という分け方を用いて説明を行った。

【研修後の感想から】

上に示した流れ、内容で研修を実施し、研修終了後、受講生に感想を尋ねた結果を表5に示す。

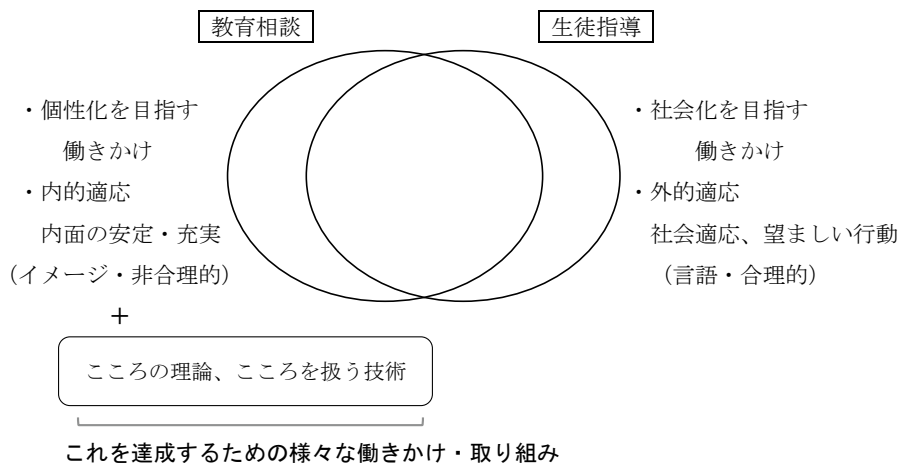
表5 研修後の感想 (抜粋)

- ・改めてじっくりと考えることができた時間だった。(中学校)
- ・講義内容はもちろん、グループワークでの話し合いが有意義だった。
- ・たくさん思考したり、話し合いを行ったりして、自分自身の考えを整理することがふえてきた。
- ・教育相談に対する意識や知識をもっと高めていかなければいけないと感じる。
- ・教育相談とは何かを改めて考え、自分の見立ての上での視点について振り返ることができた。現在対応している児童に、何が正解か分からず試行錯誤の状態であるが、今日の話伺い、校内で同じ方向性で連携できるような実践を行って行くことと思えた。
- ・教育相談のあり方を、もう一度考えてみる良い機会となった。演習では、他校の現状と自校を比べ、見えなかった部分を知ることができた。個性化と社会化が重なっている部分を意識し、見立てを持ちながら生徒に接していこうと思った。
- ・考えさせられるような問題提起があり、ためになった。日頃の自分の振り返りや今後の教育活動を考えさせられた研修だった。
- ・日頃、様々なもの(知識、職場環境、技術等)をひとまとめに捉えていたものを整理し、その中核になっているものが何かを考えることができた。
- ・教育相談で大事なことは何か、自分で振り返って考えてみる→他の先生方と話し合う→講師の先生の話の伺う、という段階を踏むことで、“みんな”で行う教育相談について理解が深まった。

- ・教育相談も通級指導も、何となく経験や勘に頼って、いざ他の先生に伝えようとした時に、筋道を立てて理論的には伝えられなかったり、エビデンスがないことに焦りを感じたりしていたので、自分を整理したり、他の先生と意見交換をしたり、講師の話の聞いたりすることで、自分の漠然と感じていた不安やモヤモヤ感の原因について少し近づけたように感じた。
- ・これまでの研修で様々な話を聞き、たくさんの学びがあったが、それらの学びを総括して点が線で繋がれたような、腑に落ちるような内容で、「教育相談って、おもしろい。もっと学びたい」という気持ちになった。
- ・はじめのワークで、自分のこれまでの教育相談についての考えや姿勢を自分で確認できたのがよかった。後半の講師の話の中での「教育相談⇔生徒指導」、「内的⇔外的」という捉え方によって頭の中の整理ができた。このあたりのことを自分の中で再度整理し、自校の先生方にも資料を作って配れたら、と思った。
- ・人によって教育相談の捉え方が違う、という話を聞いたが、グループワークを行って、確かにその通りだと感じた。立場や地域によって、それぞれ違いがあった。校内でも実施して、職員の意識を高めていきたい。
- ・ワークに取り組む中で、自分の考えがすっきりした。また原理のとらえ方も自分の中で曖昧になっていた部分をわかりやすく説明してもらい、大変ありがたかった。
- ・教育相談＝個性化を目指す、生徒指導＝社会化を目指す、というのが、とてもしっくりきた。
- ・教育相談とは何か、ということをしっかり見直すと、問題点が見えてくるのがわかった。学校の中で教育相談体制を作ることの大切さも考えた。
- ・他校の先生方と意見交換することができ、改めて教育相談のあり方や実態を知ることができた。

「教育相談をとらえ直す」 ～教育相談とは何か（試案）

教育相談の理解（原理）に関すること



問題行動の理解と対応に関すること

- ・問題行動をとらえる視点
- ・教育相談に関係する基礎的知識
- ・見立てを持つ
- ・関わりの実際
- ・学校としての関わり

子どもの成長を支える学校環境

- ・自己肯定感を育てる教育活動
- ・学級・集団の活用
- ・学校組織、教員集団に関すること

教育相談を円滑に進めるために

- ・教師個人のあり方に関すること
- ・保護者、関係機関との連携

図1 研修で説明した内容（抜粋）

感想を見ると、「考えが整理された」、「すっきりした」、「腑に落ちる」など、経験的にはわかっているが整理できていなかったものが、整理された機会になったようだ。この過程には、研修の進め方（自己の認識を確認→他の受講者とのシェアリング→講師による講話）も、うまく作用したと考えられる記述も見られた。

また、「校内でも実施して、職員の意識を高めていきたい」、「自校の先生方にも資料を作って配れたら、と思った」という感想にみられるように、このような整理（教育相談の概観の明示）は、他の教員との共通理解を図る際にも役立ちそうだと認識されたと考えられる記述もあった。

3 総合的考察

- ・本研究では、現職教員の教育相談に対する認識が曖昧であったり、教員間で認識の違いがあることを明らかにし、そこから教員の教育相談についての理解を深めたり、認識を整理したりするための研修を計画し、実施した。その結果、研修を通して教育相談に対する認識や理解が深まった、変化があったとする感想が多く得られた。
- ・今回、「自己の認識の理解」→「他者との意見交換」→「講師による講話」という流れで研修を進めたが、この流れは教員の認識を整理したり、理解を深めるといった研修の目的に適してものであったことが、感想から読み取れた。
- ・今回、「教育相談の概観を明示する」ことで教員の認識、理解の深まり・変容を狙ったが、これによって認識が「整理された」、「このような資料を自校でも活用した

い」といった内容の感想があげられ、このモデル（内容と使い方）が個人の認識の整理、他者との共通理解の視点として活用できる可能性が示された。より詳細なフィードバックをもとに、明示する内容をさらに整理、精選する必要がある。

- ・研修を通して、教員の教育相談についての認識に良い意味での影響を与えたと考えられるが、認識と実際の行動との関係を検討し、連動できる方法を考える必要がある。認識レベルでは、「わかっている」、「やっている」つもりでも、実際には十分な関わりができていないことも少なくない。認識だけでなく、実際の行動の中に教育相談的な視点や関わりが活用されているかを確認しつつ、実践を進める視点が求められる。
- ・今回利用したのは、教育相談に関心のある教員を対象とした研修であったが、1回の研修でも教員の探究心を刺激し、教育相談についての関心・認識に影響を及ぼした。学校現場でも、教育相談についての研修がもっと定期的に、かつ頻繁に行われたり、日常の教育活動を教育相談の視点から整理したり、意味づけたりする機会があれば、多くの教員が教育相談的な視点を理解できるのではないか、という手応えもあった。教育相談に限らず、校内研修のあり方や研修のファシリテーターの育成・活用について考えていくことが必要である。

引用・参考文献

- 笠井孝久 2015 教育相談に対して現職教師が抱える困難 千葉大学教育学部研究紀要 第63巻 pp. 187-197
 文部科学省 2010 生徒指導提要 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm